

考古学から見たヒトの移住と言語置換

——津軽海峡の南北地域における続縄文時代から現代——

Archaeological study of migration of human being and language replacement
—— From the post-Jomon period to the present in the south and north of the Tsugaru Straits ——

松本建速

Abstract

In this paper an attempt is made to consider the migration of human being and language replacement in northern Tohoku and southern Hokkaido of the Japanese archipelago. Based on the principles summarized by C. Renfrew (1987) and P. Bellwood (2005), and on some archaeological studies, I argue that the Japanese language spread from southern part of Japan with migration of farmers and herders to northern Tohoku in the 7th century, and to Hokkaido in the 20th century. In this area, the migration of people made it possible to replace the language of indigenous people with the language of new inhabitants. And at the same time, the migration changed the assemblage of material culture. In this study, some distribution maps of ancient settlements are effective, made from observing assemblage of the types of material culture excavated from archaeological sites, from the 3rd to the 17th century. In particular, the assemblage of pottery used for cultural rituals and festivals can be used as a symbol of archaeological culture. And from the 18th century to the 21st century, I use various records of Ainu people for consideration, not limited to archaeological materials.

1. はじめに

古代の日本列島の本州島東北部で見られた3回のヒトの移住を3つの波として述べたことがある(松本2006)。第1波は5世紀末～6世紀初頭に東北部の東側の一部に見られ、第2波は7～8世紀に東北部の東側の比較的広い範囲で、そして第3波は9～11世紀に東北部の全域への移住という形で起こったと説明した。移住者は3波とも日本列島上の古墳文化域すなわち古代日本国域からの日本語話者であり、5世紀前半まで当該地域に住んでいた続縄文土器を使う人々とは異なる言語体系に属していた。その第1派はごく一時的なものであり集落は継続しなかったが、第2派は雑穀栽培をしながら馬飼をおこなえる土地を探してのものであり、人々の流入は継続し集落が増加した。第3派はそれまで移住がほとんど見られなかった東北部西側の稲作適地を多数の人々が目指したものであり、人口増加も莫大であった。これら

3つの波と表現した3度の移住は古墳文化域あるいは古代日本国域からの農耕・牧畜民によるものであり、日本語話者によるものであったという説をその後も発表してきた（松本2011b・2013・2018など）。

以上の説は、古代日本国の正史である『日本書紀』齊明天皇紀5年（659）の条に、非農耕民だと記された7世紀中葉の蝦夷が、実際には当時の東北北部には住んでおらず、さらに北の北海道以北にしか居住していなかったことを述べることを主題としたものだった。したがってこの説が正しければ、古代の蝦夷が縄文時代以来東北地方に住み、当該地域にアイヌ語系地名を名付けた人々であり、後のアイヌ民族になる可能性もあったという、考古学、文献史学、地名などを駆使し、広く認められてきた従来の説（工藤2000）が成立しなくなる、非常に重要な説である。

しかし古代の東北北部の住民が日本語を話す移住者だというこの説については、ほとんど言及されることがないのが現状である。わずかに、北海道の住民の歴史を考古学的に考える研究をおこなう瀬川拓郎による肯定的見解（瀬川2007・2015）、あるいは「移住」があったことを否定する論があるくらいである（八木2007・2011）。この説が登場した2006年以降に刊行された『青森市史』や『青森県史』といった、古代の蝦夷に関する総説を含む最近の論考にもこの移住説は一言も言及されていない（青森市2012、青森県2018）。

7世紀の東北北部への「移住」を否定する説を見ると、その時期に当該地域に出現した土師器坏がミガキ調整であることや、墓の構造に「在地色」があることを理由として「在地社会のなかでの発展」だったと説明している（八木2011）。しかしその理由では移住があったことの完全な否定にはなっていない。ミガキ調整の土師器坏は東山道地域（信州や会津地域）で作られており（松本2010）、とくに信州では東北北部のものに類似した構造の墓もあり、しかもそこは馬飼の本場でもある。7世紀の東北北部では馬飼いが開始されており、信州を含む東山道地域は移住者の出身地の候補地の一つとなる（松本2006・2010）。また、7世紀までの150年ほどの間、東北北部で遺跡がほとんど見つかっておらず「在地社会」が確かめられないことについての言及もない。

一方、古代の東北北部に農耕・牧畜民による大規模な移住があり、言語の置換がおこなわれたという見方は、旧石器時代から世界中に拡散し、農耕民となった後にはさらに居住域を拡大してきたホモ・サピエンス（以下では日本語の学術表記としてヒトと記すことを基本とするが文脈によってはホモ・サピエンスも使う）の特徴を考えれば、当然考えねばならない重要な内容であり、広い視点からの考察が必要である。また、日本列島における農耕・牧畜民の移住という視点で言えば、東北北部よりさらに北の北海道でそれが大々的に始まったのは19世紀後葉であり、先住民の言語が新来民の言語に置換えられてしまったのがほぼその100年後の20世紀後葉のことであった。しかも北海道における大規模なヒトの移住と言語置換については、近代以降の出来事であったために、古代と違い客観的な方法による記録もある。

そこで本稿では、北海道における移住と言語置換のあり方を考古学的考察が可能な形式の情報としてまとめ、その結果を古代の東北北部の考古学的知見の解釈に応用し、当該地域における古代のヒトの移住と言語置換について考察することを目的とする。そして、古代の蝦夷は7

世紀以降の東北北部には存在していなかったことを、人類史的視野のなかで改めて語ることとしたい。

2. ヒトの移住と言語に関する考古学研究

人間は移住する存在である、移住は世界の歴史そのものだという視点で、地理学、考古学、歴史学研究者たちが書いた書籍がある。『図説人類の起源と移住の歴史 旧石器時代から現代まで』である（R. キング編2008）。190万年前にホモ・エレクトスがアフリカを離れアジア各地に広がったことから始め、その後のホモ・サピエンス誕生以来の様々な地域への移住について、現代の移民に至るまで、広く概説している。移住の動機・契機あるいは要因として、自発的な新天地の開拓、迫害、追放、亡命、飢饉、国家の消滅、奴隷貿易、植民など様々な様態が示される。また、言語を文化的な DNA に見立て、インド・ヨーロッパ語族を例に、世代を超えた語族間のつながりの考察を試みている。ただしこの著作は移住そのものに重きを置いた概説であり、ヒトの移住と言語との関係については主題としていない。

インド・ヨーロッパ祖語の発生と移動に関して考古学的知見と放射性炭素年代にもとづき、そしてヒトの移住と言語置換のモデルを示しながら仮説を提示したのは C. レンフルーであった（C. レンフルー1987）。そのモデルについては後の節で改めて述べることにして、ここではそこで掲げられた仮説に触れておく。ヨーロッパでは、在地の狩猟採集民がアナトリアあたりに住む農耕民から必要な植物種や動物種を手に入れて農耕を始めた、すなわち在来民の「文化変容」として始まったのではなく、紀元前6,500年以上前にアナトリアの農耕民がギリシャに移住してきたのが始まりだというのである。そしてその農耕民は、新たな言語であるインド・ヨーロッパ祖語をヨーロッパに持ち込んだと氏は考えた。レンフルーはその後もその考えを維持し、年代については紀元前7,000年へと、さらに絞り込んだ（C. Renfrew 2001; p. 54）。

このレンフルーの考え方に触発されながら地球全域での農耕と言語の拡散について、民族誌と考古学データにもとづき検討したのが P. ベルウッドであった（P. ベルウッド2005）。そのなかで氏は非常に重要な問題提起をおこなった。採集狩猟民は農耕を知ったからといってすぐに、あるいはすべてが農耕民になるのか？というものである。そして、そういったことは稀で、農耕拡散は主として新石器時代やその形成期に、初期農耕の文化上、言語上の子孫が人口を増大させ、その文化的言語的境界を外に広げた結果だと考えた（P. ベルウッド2005; 58-59 頁）。その移住が起こった年代は地域によって様々だが、すべて過去12,000年以内の出来事だった。そして、その初期農耕の拡散があっても、様々な理由によりそれが定着しない場合もあった。これは非常に重要な指摘である。氏による日本列島上の人々についての言及は少ないが、それに触発されて考えるならば、東北北部での田舎館式期以降の農耕技術の消滅、北海道でのアイヌ社会と和人社会の関係、さらには縄文時代の様々な大陸的な文化の出現と変容・消滅についても、この見方で考察してみる必要がある。本稿でもアイヌ社会と農耕社会との関連について、後の節で触れる。

さて、これまでに見てきたように、ホモ・サピエンスは誕生以来、集団で移住をして旧石器

文化段階のうちに五大陸のかなりの地域に分散した。旧石器時代における移住の理由は様々あろうが、新石器時代以降の移住の場合には農耕・牧畜技術の発達とそれに関連した人口増加と土地の獲得の問題が大いに関係していることは間違いなさそうである。そして新石器時代以降の移住の場合、それに伴う言葉の拡散、あるいは言語置換も、考古学で問うべき重要な問題であった（C. レンフルー1987、P. ベルウッド2005）。言語置換の正体とは、農耕民の移住だったのである。

日本列島に目を転じるとそうした研究は非常に少ないのだが、C. レンフルー（1987）の言語置換モデルを基礎にした先駆的研究が M. ハドソンによっておこなわれた。氏は弥生時代に朝鮮半島から日本語話者である稲作農耕民が移住し、縄文系の採集狩猟民の言葉と日本語とが置き換わったと考えた（M. Hudson 1994、M. ハドソン 1999）。日本の考古学や言語学分野では、まだこの説は十分に検証されてはいない。ただし集団としての移住者が稲作を持ち込み、人々の言葉が先住民と異なる系統の言葉であった場合、移住先で最終的に移住者と先住者の言葉のどちらの言葉が使われるようになったのかは、しっかり検証してみなくてはならない問題である（註1）。

弥生時代の農耕社会成立期に関する研究ではないが、日本列島上での農耕民・牧畜民の移住と言語置換については、最初に少し述べたように、東北北部で7世紀以降に日本語古語を話す農耕・牧畜民の移住があり、縄文時代以来その地域の採集狩猟民が話していたアイヌ語系の言葉ではなく、そこでは日本語が話されるようになったという見解がある（松本2006・2011b・2013・2021など）。C. レンフルー（1987）の方法にもとづき、先住民としての採集狩猟民がいる地域に新来民として農耕・牧畜民が移住した結果、新来民の言葉に置き換わったと考える説である。

一方この説で問題にした地域の古代には、農耕民である古代日本文化の人々とは別の非農耕民である蝦夷が住んでいたと、当時の文献に記されており、またそこにはアイヌ語系地名も存在することから、これまでも蝦夷の言葉について関連分野の研究者が度々論じてきた。言語学（金田一1950）、文献史学（高橋崇1986、高橋富1991、熊谷2013）、考古学（工藤2000、八木2018）のそれぞれの視点からアイヌ語系地名が考察され、当該地域の古代の蝦夷こそアイヌ語系言語を話していた人々であると考えられてきた。これら従来の研究は東北北部の古代の住民が前時代以来の在住の民であり、徐々に日本文化を取り入れ文化を変容させてきたのだと理解しており、そこで言語置換が起こったとは考えていない。

しかし本節で述べてきたように、ヒトの移住と言語の拡散、とくに農耕社会、すなわち人口増加社会が出現して以降については、農耕社会の拡散と言語置換の問題として理解することもでき、この視点で古代の東北北部への移住仮説を見れば、むしろこちらのほうが考古学資料から組み立てられる過去を無理なく説明できることがわかる。以下の節で、C. レンフルー（1987）、P. ベルウッド（2005）らの農耕と言語の拡散に関する原理、仮説を改めて示し、東北北部、北海道南部の農耕民・牧畜民の移住と先住民との関係、言語および文化の変化を考える。

3. 考古学でヒトの移住と言語の置換を読み取る方法と資料

(1) いくつかの主要な原理と言語置換モデル

1) ヒトの脳の構造は基本的には同じ

考古学で物質文化、その出土状況と自然環境との関係にもとづいて過去の人類の活動を復元できるのは、物理的現象が再現できると考えることと同様、ヒトとしての脳の構造が時を越えて不変であり、類似した条件下ではほぼ同じ反応をすると考えられるからである。P. ベルウッドも人類に生物学的統一性があると仮定して、「個々の人間行動パターンは、農耕の開始から現在にいたるタイムスパンにおいて比較的均質とみなしうる」(P. ベルウッド2005; 12頁)とし、これを考察の主要原理の一つとした。本稿でも、このような人間行動パターンの普遍主義的立場を基本とする。

2) ヒトは言語共同体を形成する

文字記録が残っていない時代や文字記録を残さなかった人々を対象として、考古学で言葉を考える場合、言葉そのものではなく、言語を用いた人間集団について、その集団の拡散をもたらした歴史的背景について考えることになる (C. レンフルー1987; 102頁)。一つの人間集団がある場合、集団となるには構成員たちを繋ぐ要素が必須であり、その要素が「共通の言葉」だからである。言葉による不自由ない意思の疎通を基本としてまとまっている集団を一つの単位とみなせるのだが、その集団を「言語共同体」と呼ぶことができ (F. ソシユール1916)、それを物質文化に置き換えて理解する場合、考古学的文化がそれに相当する (松本2021)。

地域や時代を問わず、ヒトは言葉を話す能力を持ち言葉を話していた。E. タイラーは「文化あるいは文明とは、知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習その他、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や慣習の複合体だ」と述べた (E.B. Tyler 1871; p.1)。この考えは現在でも様々な事典類や文化人類学の教科書等で引用され、文化の定義のスタンダードと理解できるのであるが、とくに重要なのは、文化は「社会の成員としての人間」が持つという理解である。

ただし、ここで述べられた具体例の大部分は「芸術」意外、物質文化を生み出す基礎にある“意識・思考・思想”といった、人間の脳のなかにある無形の部分が主となっている。考古学的方法で人間の存在を認識できるのは物質文化が存在するときだけなので、そういった“無形”のものを“有形”とし、物質文化とされた場合にはじめて考古学的に人間を認識できることになる。そしてその物質文化は、タイラー風に言えば「社会の成員としての人間」が作った物質文化である。どんな物質文化にも社会が反映されているのである。

一つの集落遺跡では、時期ごとに物質文化の組合せが決まっている。そして、同一の組合せとなる集団が複数あるとき、それは「考古学的文化」として把握される (V.G. チャイルド 1956)。例えば、考古学的文化を近世～近代初頭の日本列島に照らして考えると、北海道におけるアイヌ文化の集団や日本文化の集団のような、それぞれに異なる物質文化の組合せを持つ文化的集団となり、その背景にアイヌ語と日本語という言葉の違いがあることがわかるのである。

3) 採集狩猟民と農耕民の接触に関する言語置換モデル

C. レンフルー (1987) と P. ベルウッド (2005) におけるヒト集団の移住と言語置換に関する見解をもとに、次のようなモデルを示すことができる。現生人類はアフリカで誕生した後、旧石器時代のうちに世界各地に拡散し、それぞれの地域の環境に適応し、採集狩猟民として暮らしていた。その領域に新たに農耕民 (牧畜を含む場合もある) となった人々が移住する場合に言語置換が起こりうる。典型的な2つのモデルを示す。

【言語置換モデル1】

人口密度が非常に低く、しかも100km四方ほどの領域 (註2) が数世代の間ほぼ無住状態となっているような土地がある場合、移住者はほぼ無住地域に移り住んだかのように認識する。この場合、移住者の言葉、すなわち新言語が移住先の地域のものとなる。考古学資料をもとに通時的にこの地域の考古学的文化の変化を見るならば、この状況は、採集狩猟民である先住民の言語から農耕民である移住者の言語に置き換わったと理解できる。

このモデル1は、それまで誰も住んでいなかった地方にヒトが移住した場合に起こる新語の定着モデルである「最初の入植」(C. レンフルー1987; 154頁) をアレンジしたものである。

【言語置換モデル2】

少数の先住民が暮らす領域に、圧倒的多数となる人口規模を持つ移住者集団が入る場合。先住民の言葉から移住者の言葉に言語置換が起こる。

以上の2つのモデルを提示することができるのだが、それが可能なのは、農耕やそれに付随する様々な新来民の技術あるいは、それを実現する社会構造が、移住先の自然環境を、先住民よりも効率よく利用でき、あるいはよく適応している場合である (C. レンフルー1987; 159頁)。したがって、逆にそのような条件にない場合は、採集狩猟民は必ずしも農耕を基本とした社会を作ることはなく、言語置換も起きない。中世から近世まで北海道南部で見られた、アイヌ社会と日本人社会との関係がそうである。これについては考察の項目でさらに詳しく述べる。

(2) ヒトの移住と言語置換を把握する方法

1) ヒトの移住の考古学的把握方法

第1現象の把握【無住の地の集落出現】

考古学的に無住の地だと認識できる広範な地域に集落が突然できる場合、それはヒトの移住の結果だと評価できる。通時的な集落分布図の作成、これがその把握方法である。その場合、重要なのはいかなる考古学資料を集落だと理解するかである。基本は住居跡の存在である。1棟でもそれがあればそれを集落の片鱗だと理解する。人間は社会的存在だからである。また、住居跡が検出されていない場合でも、長期に渡る生活が想定されるほどの量の土器片が出土している、あるいは墓などの遺構が出土している場合には、付近に集落があったと考えてよい。ただし、出土土器の破片数が非常に少ない場合は、交易に際し利用する通路近くのキャンプ地であるなど、その文化を持つ人々が活動した領域ではあるが、集落があったとまでは言えない。また土器片すら見つからない場合は、無住の地だと理解する (註3)。

第2現象の把握【集落の急増・人口の急増】

次に考えるのは、もともと集落があった領域への移住の読み取り法である。例えば、近代にアイヌ民族が住んでいた領域への日本人の入植がそれに相当する。この場合、50年で2倍以上の人口増加がある（松本2020）。一方、日本列島上における農耕社会の出現から現代までの人口の増加を例にするならば、記録がある時期に限ると、1721年から1822年の100年ではほぼ増減無し（関山1969）、1822年から1872年の50年では1.2倍/50年、1872年から1922年が1.6倍/50年、1922年から1972年が1.9倍/50年、1972年から2019年が1.2倍/50年である（総務省統計局2021）。このように安定した農耕社会でも日本列島上ではそれほど急激な人口増加はなく、1868年から1920年の北海道の移民政略期のように、2倍/50年よりも大きな数字になった場合には、ヒトの移住があったと考えられるのである（松本2020）。

ただし注意しなければいけない点がある。ここに述べた数字は農耕社会以外には使えないことである。採集狩猟社会の場合は1人のヒトが一生の間に暮らす集落は複数箇所となり（遠藤1997・2017）、集落遺跡数を単純に人口として読み替えることはできない。その社会が農耕社会か否かを考古学資料から読み取ったうえで集落遺跡の増加の理由を判断せねばならない。

2) 農耕社会への変化の判断方法

【農耕社会の定義：主食穀物の栽培・農事暦と関連儀礼・人口増加社会】

「農耕社会」は農耕を基本とした社会と定義される。「農耕 Farming, Agriculture」は主食である穀物や雑穀などの「栽培 Cultivation, Horticulture」が生業活動全体で支配的となることである（尾藤2003;57頁）。ここに記したように「栽培」と「農耕」とは区別される概念である。現在では、縄文時代にもヒョウタン、ダイズ、アズキ、コメなどが栽培されていたことがわかっている（中山2010）。また、遺跡出土の植物遺存体の研究によれば、北海道でも縄文時代以来、アワやキビの雑穀が栽培され（山田2000）、アイヌ民族も同様にアワ、キビ、ヒエなどを栽培していた（山田2008）。それについては文献記録からの検証も多数ある（煎本1987、山本1996）。

そして「農耕社会」の重要な特徴として、それを維持できる組織化された社会集団を持つという点がある（宮本2009）。したがってその社会では、たとえ居住域の近くで大規模な農耕がおこなわれていないとしても、その社会の一員でいられるのである。近世北海道にあった松前藩のあり方がそうであった。海産物等と引き換えに本州側から大量に米を得ていたのである。松前藩の場合、稲作農耕に関連する物質文化が欠落することになる。松前藩を例にすれば、日本列島上の近世農耕社会を特徴づける物質文化の組合せとしては稲作農耕に関連するものは必須でないことになる。アイヌ民族の基本を渡辺仁が「クマ祭複合体」と見たように（渡辺1972）、農耕社会を特徴づける要素として、主食生産を支える「農事暦」を基本とした諸儀礼や祭だと見ておく。

また、農耕民と採集狩猟民の大きな違いに、前者は人口増加社会だが、後者は人口がほぼ増加しない社会だという点がある。民族学的研究をもとにした数値では採集狩猟民の人口が倍増するには23,000～69,000年かかる（木下2003）。このことを木下は別の論考で「きわめてゆっくりとしたスピードで増加しており、その長い歴史からすれば、ほぼ静止していたと言っても

よい」と述べる（木下2014;50頁）。

【物質文化にもとづく農耕社会の判断】

農耕社会が物質文化として反映されやすいような特徴に次の3点がある。①主食穀物の栽培、②主食の安定的な耕作を支える農事暦と関連儀礼・祭の存在、そして③人口増加社会であることである。②の特徴はさきに述べた「組織化された社会集団」を示す一側面でもある。①については、そうした栽培種が出土しても、一定以上の面積を持つ畑・水田が常に検出されるわけではない。そこで、それと②③に関連する物質文化を組み合わせることが必要になる。

本稿で問題にする地域と時期であれば、日本列島上で馬の飼育が広くおこなわれるようになり須恵器の使用も始まった古墳時代中期が、物質文化的にも②に関連した農耕文化の組合せを理解しやすい。①の主食穀物を食する生活様式と②の農事暦に関連した諸儀礼・祭を反映した物質文化の組合せとして、穀物の出土とカマド・土師器（長胴甕・甌・球胴甕・坏・高坏）・須恵器の存在をあげることができる。穀物は常にどの集落遺跡からも検出されているわけではないので、カマドや土師器等の物質文化の組合せを見ることになる。儀礼や祭に関連するものとしては特別なときの料理に用いる甌、それらを盛り付ける高坏、儀礼・祭に参加する者たちの持つ銘々器としての坏、酒を貯蔵する須恵器甕といった土器類がある。したがって、土器は単に生活様式を示すのみならず、文化の象徴として見ることもできる場合もある。さらに古墳時代中期以降であれば馬の存在や馬飼を反映した物質文化も農耕・牧畜社会を示す。そして③に関連して、一定以上の人口があることを示す集落があり、その数が短期間で増加していれば確実である。

3) 言語置換を読み取る方法

本稿で対象とするのは、先住民が採集狩猟民などの非農耕民、移住者は先住者と異なる文化を持つ農耕民という組合せである。わかりやすく言うと、中世以降の北海道を舞台とした場合には、アイヌ語を話す非人口増加社会の人々が先住民、そこへの移住者は農耕民である日本語話者である。そうした場合、農耕社会に変化したか否かを的確に判断し、さきに示した言語置換モデルを掛け合わせれば先住民の言葉が移住者の言葉に置換されたか否かがわかることになる。そして、その関係を応用して東北北部における古代の言語状況についても考える。

（3）資料とその図示方法

扱う地理的範囲は、近代から現代のアイヌ社会について語る場合には北海道全体とするが、考古学資料を扱う場合には、津軽海峡の南北地域とし、東北北部から北海道南部すなわち渡島半島から石狩低地帯までとする。資料は、東北北部と北海道南部でほぼ同様の続縄文式土器が使われていた後北C₂・D式期、実年代にして3世紀後半から21世紀前葉の現代までのすべての物質文化である。ただし、古ければ古いほど物質文化のなかでも有機物や金属を素材としたもののなかには消滅してしまっているものも多く、考古学資料となったもののなかでのすべてということになる。一方、現代の物質文化のすべてを見るのは種類が豊富すぎて不可能である。そこで、確実にアイヌ民族が存在するという記録が出現して以降については、1880年代のアイヌの人々の活動をもとに渡辺仁によってまとめられた「クマ祭複合体文化」の概念図（渡

局多くの場合、土器をあげることになるのだが、個々の型式名をあげるのではなく、続縄文土器、擦文土器、土師器、須恵器、陶器のように、器の種類を示す。生業としては、採集狩猟、土錘を用いるタイプの漁撈か否か、農耕、牧畜、製鉄技術等の有無を見、文字の使用を把握するために硯の有無を確かめる。葬制としては、築造に掛かる労力が続縄文時代以来ほぼ同じである1人分の容積の土坑墓か、その何倍もの労力や専門的知識と技術を必要とする古墳文化由来の墓＝末期古墳が築造されたかを見た。これら5つの項目を12の文化要素として分け、その存否を確かめ、それらすなわち物質文化の組み合わせを50年ごとの消長図として作成した。なお、その文化、すなわち社会の広がり具合に、時期によって津軽海峡の存在の影響が出るか否かを考えるために、北海道南部と東北北部とを区分して一見して比較できるような図を作成することにした。

ただし従来の研究では、北海道出土の土器のうちどれを擦文土器あるいは土師器と呼ぶかについて、統一されていない面がある。土師器の影響を受けて北海道で成立した土器について、すべてを擦文土器と呼ぶ研究もあれば、古いころの土器を土師器と呼ぶ研究もある。本稿では横山（1990）に倣い古い時期のものを土師器と呼ぶが、それらには北海道特有の変化もあるので、7世紀末葉～9世紀前半までの横走沈線のある土器を「横走沈線土師器」、9世紀後半以降の刻文土器を「刻文擦文土器」と呼び分ける。

3. 結果 津軽海峡の南北地域の文化の差が大きくなった時期

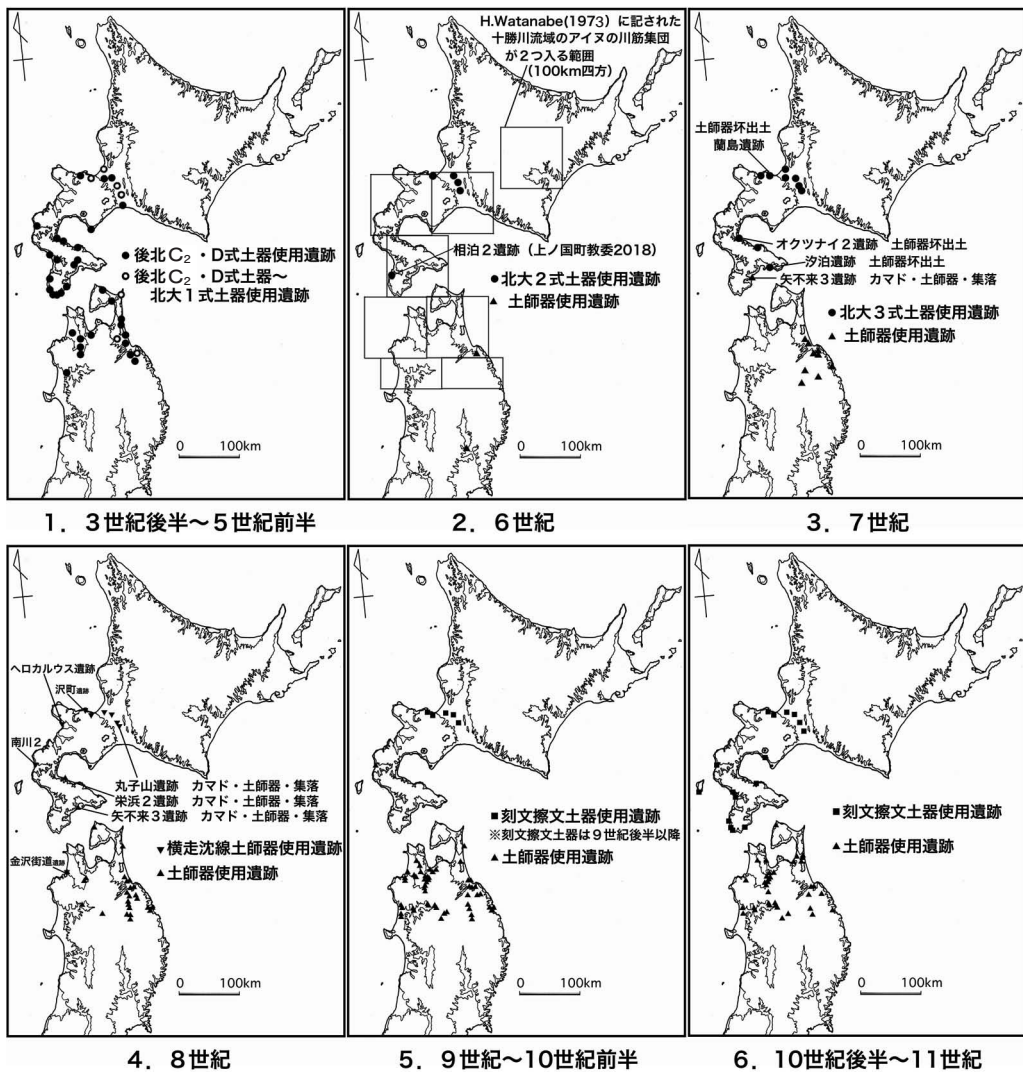
（1）概要

3世紀後半から17世紀初頭までの遺跡分布図を第2図および第7図として示した。膨大な遺跡数となるので個々の遺跡名は記していないが、青森県史編さん古代部会（2005）、松本（2006・2011）、関根（2014）、北東北古代遺跡研究会（2014）、樺田（2016）などをもとに作図し、本稿で言及する遺跡名だけ図中に示した。なお第2図-1は5世紀いっぱい型式である北大1式までの分布状況を示しているが、東北北部出土の当土器は5世紀前半までのものである（青森県史2005）。土器型式の細かな年代と分布範囲の関係については第4図で説明した。

第3図として3～21世紀の北海道南部および東北北部の文化要素の変遷を示した。図中では、絶対年代を示す場合、100年を前半と後半とに二分し、世紀前半・後半と呼ぶ。ただし本文中では、今日の土器研究の年代区分に合わせて年代を記した。したがって、100年を二分して把握されているもの、三分して前葉・中葉・後葉として把握されているもの、他に100年の最初のころを初頭、最後のころを末葉と表現される場合がある。同様の文化要素が継続している時期を一区切りとして次に簡単な解説を加えておく。

【3世紀後半～5世紀前半】（第2図-1、第3図）北海道南部と東北北部の物質文化の組合せが同じである。後北C₂・D式土器、北大1式土器が使われている（第4図）。この時期には、北海道南部にも東北北部にもいわゆる「竪穴住居」はみつからない（第5図）。両地域の住人とも黒曜石製のラウンドスクレイパーを用いていた。

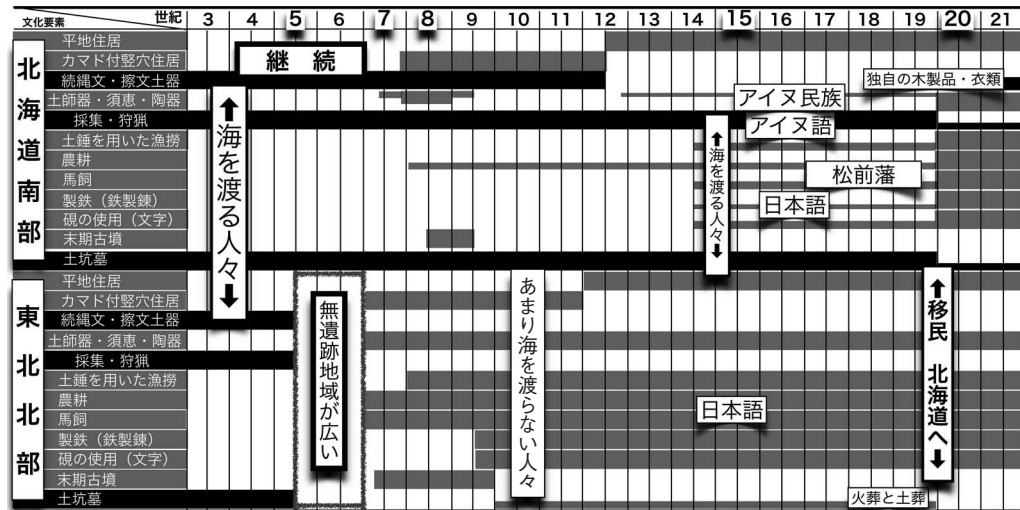
【5世紀後半～6世紀】（第2図-2、第3図）北海道では北大1式～北大2式土器が使われ



第2図 北海道南部および東北北部の集落

ていた。ただし、この時期の渡島半島南部には北大2式土器が出土する遺跡が非常に少ない。東北北部からは北大2式土器は出土していない。東北北部東側の一部から同時代の古墳文化期の土師器のセットとカマド付竪穴住居を持つ集落が見つかった。八戸市田向冷水遺跡である（八戸市調査会2001・八戸市教委2005）。八戸市の北20kmほどにあるおいらせ町中野平遺跡から5世紀中葉ごろの石製模造品も出土している（下田町教委1991）。素材の質感と製作技法および形態から群馬県域の古墳文化地域の製品でだと推定できる。石材の化学組成からも群馬県あたりの三波川変成帯の結晶片岩が利用された可能性が高い（松本・伊藤2008）。

【7世紀前葉～後葉】（第2図-3、第3図）7世紀に入るまで150年ほどの間、東北北部には人々の生活の痕跡が見えなくなっていたが、7世紀に入ると、東北北部と北海道南部の人々が



第3図 北海道南部および東北北部の文化要素の変遷 3～21世紀



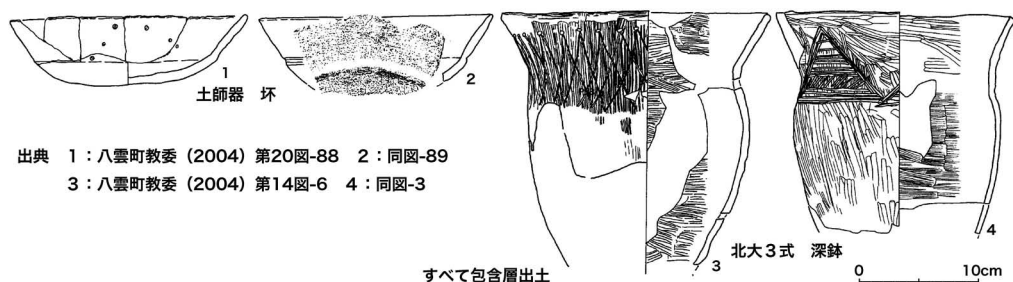
第4図 北海道南部および東北北部の土器の変遷 3～13世紀



第5図 北海道南部および東北北部の住居の変遷 3～13世紀

持つ文化が大きく異なるようになった。東北北部ではカマド付竪穴住居を持つ集落が出現し、長胴甕、球胴甕、甑、坏、高坏といった組成を持つ土師器が製作・使用された。坏の内面は黒色処理され外面調整はミガキである。雑穀栽培がおこなわれ馬も飼われた。末期古墳を持つ集落もあった。利器は鉄器となった。製鉄はおこなわれていない。

一方、北海道南部では竪穴住居は見えない。土器は北大3式と呼ばれる段階になった。この土器の調整には同時期の東北北部の土師器同様木製の「ハケ」が使われたようで、考古学ではそのハケメを「擦文」、器を「擦文土器」と呼ぶ。このように土師器の影響は見えるが、器種組成は北大1式の時期と同じで深鉢と片口鉢のままである。そしてこの段階でも器面に刻文や円形刺突文を施すこともまだ続くが、器面に「縄文」が付く例は無い。また、数は少ないが土師器の坏が伴う遺跡もある（第2図-3）。第6図として八雲町オクツナイ2遺跡出土の土師器坏を示した（八雲町教委2004）。それらは北大3式の深鉢とともに包含層から出土している。内面は黒色処理、外面はミガキ調整である。第6図-1の坏には3対の補修孔があるが、調整がミガキである点、補修孔がある点、器全体が均一の薄い作りで慣れた仕上がりである点

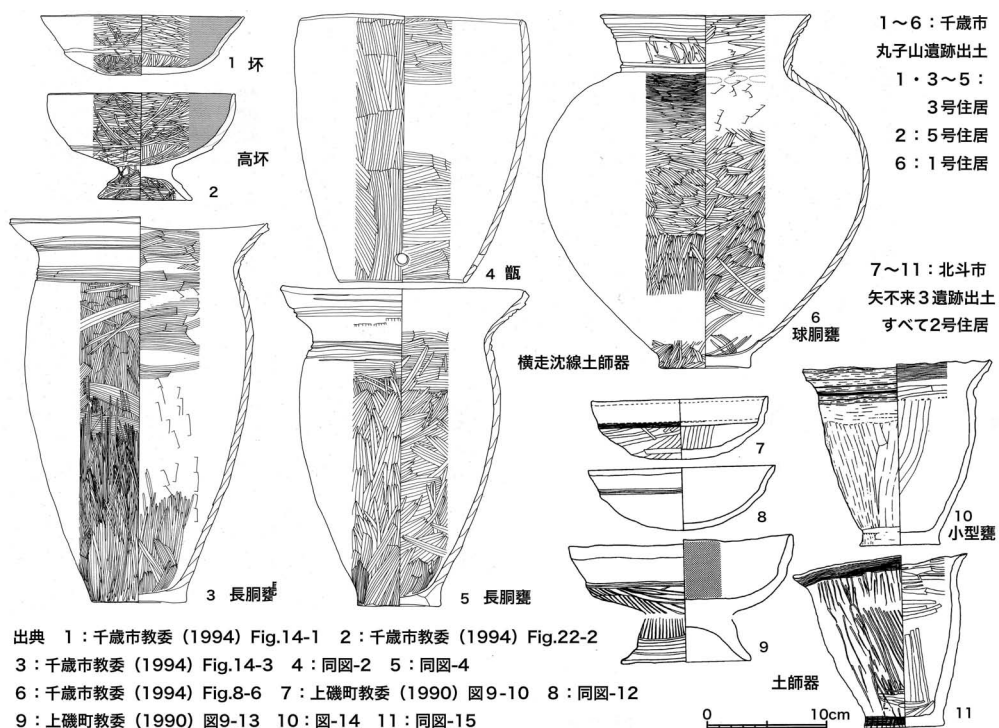


出典 1：八雲町教委（2004）第20図-88 2：同図-89
3：八雲町教委（2004）第14図-6 4：同図-3

第6図 八雲町オクツナイ2遺跡出土土器

から見て、東北北部あたりからの搬入品である。また、恵庭市中島松5遺跡からは前時代の6世紀ごろから7世紀にかけて100基以上の土坑墓が検出されており、この時期に人々の活動が継続して営まれていたことがわかる（北海道埋蔵文化財センター2002）。

【7世紀末葉～9世紀前半】（第2図-3・4・5、第3図）この時期、石狩低地帯や石狩湾沿岸などに長胴甕・甕・球胴甕・坏・高坏の土師器のセット（第7図）とカマド付竪穴住居を持つ集落が出現した。ただし甕と高坏を持つ集落は少なく、多くは長胴甕と坏だけのセットである。また、長胴甕の口縁部や頸部と肩部の境に横走沈線を1本～数本巡らせるのが普通である。時を経るとともに横走沈線が引かれる範囲が増え9世紀に入ると頸部全体に多数の横走沈



出典 1：千歳市教委（1994）Fig.14-1 2：千歳市教委（1994）Fig.22-2
3：千歳市教委（1994）Fig.14-3 4：同図-2 5：同図-4
6：千歳市教委（1994）Fig.8-6 7：上磯町教委（1990）図9-10 8：同図-12
9：上磯町教委（1990）図9-13 10：図-14 11：同図-15

第7図 北海道南部の横走沈線土師器と土師器 7世紀末葉～8世紀前葉

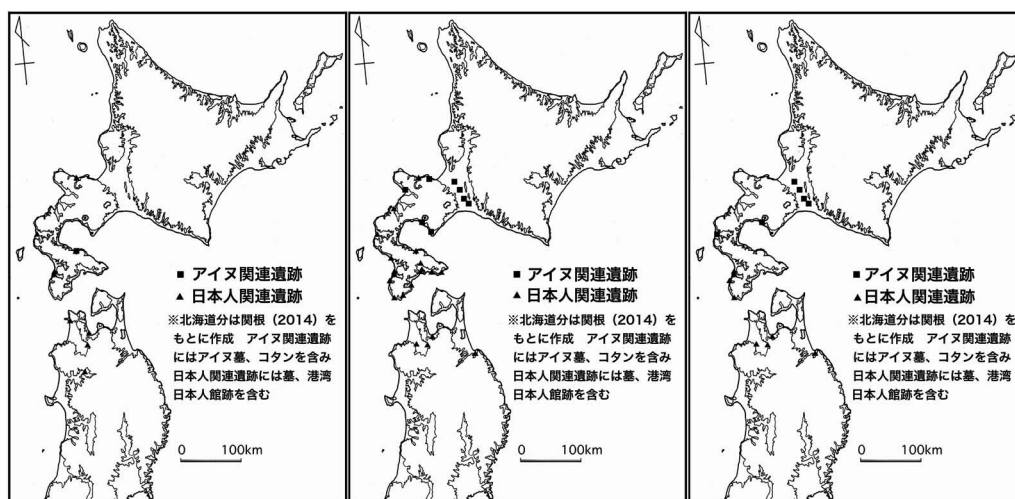
線が巡るようになる。石狩低地帯の一部に東北北部の末期古墳に類似する北海道式古墳が築造された。

東北北部では前時期から8世紀にかけては太平洋側である東側地域に集落が多く造営されたが、8世紀後半ごろから西側の地域にも集落が営まれ始める。そしてこの時期、東北北部でも横走沈線が巡らされる土師器がいくらか出土する（斎藤2016）。

【9世紀後半～12世紀前半】（第2図-5・6、第3図）両地域とも多くの集落が営まれた時期である。北海道南部では、文様がほとんどない土師器的な土器とは趣が違う擦文土器が成立した。器面上半分に刻文がびっしりと施された土器である。ただし、北海道南部では器面にあまり文様が施されない土師器的な擦文土器も多く作られる。雑穀栽培は行なわれているが、牧畜、製鉄、須恵器生産、文字使用などはおこなわれない。また、東北北部では土錘を使う漁撈方法が定着したのに対し、北海道にはその漁法は入らなかった。

この時期の東北北部ではそれまで集落があまりなかった西側の地域に集落が急増する。20棟/50年を越す集落がいくつも出現する（松本2006）。7～8世紀に東北北部の東側に出現した集落に比べ、その規模が倍以上あるものが多いのが特徴である。水稻耕作適地が選ばれており、しかも突然完全な農耕社会になっている。牧畜、土錘を用いる漁撈、須恵器生産、製鉄、文字の使用などがおこなわれ、同時代の日本文化とかわらない文化の組合せとなった。

【12世紀後半～14世紀前葉】（第3図、図8-1）北海道南部のこの時期の遺跡はあまり知られていない。松前町札前遺跡から12世紀後半ごろの擦文土器使用期に続く時期の平地住居が出土している（松前町教委1985）。これ以後、北海道では独自の土器が製作されなくなり住居跡もみつからなくなるが、後のアイヌ民族の住居同様に、13～14世紀の住居も平地住居であったと考えられる。なお、中国の元王朝の時代、14世紀前葉に成立した『国朝文類』の14世紀初頭の記録に、骨唄（クイ）が登場するが、アイヌ民族のことだと理解されている（中村2021a）。ま



1. 12世紀後半～14世紀前葉

2. 14世紀中葉～16世紀初頭

3. 16世紀前葉～17世紀初頭

第8図 北海道南部および東北北部の集落

た、中世のアイヌ史を語るうえでの基本史料とされる『諏訪大明神絵詞』も、ほぼ同時期の1356年の成立である。それによると、北海道の南部に住む渡党の外観は日本人に似ており、粗野な日本語を話すという、しかしさらに北に住む唐子と東に住む日ノ本の外観は日本人と違い、言葉も通じず、そして五穀も育てない。この唐子と日ノ本はアイヌ民族だと考えられている（中村2021b）。

【14世紀中葉～19世紀中葉】（第3図、図8-2・3）14世紀中葉～16世紀初頭には渡島半島南部の津軽海峡から日本海までの沿岸部に、道南12館と呼ばれる施設が造られた。津軽地方や北陸など、日本海を北上してきた日本民族が造営した（松前町史編纂室1984）。それから19世紀後葉の松前藩の滅亡まで、渡島半島南部の沿岸部に日本人たちが住み着いていた。17世紀初頭以前には渡島半島よりも北の北海道全域は蝦夷地、すなわちアイヌ民族の居住域と認識されていた。だが、15～16世紀には上ノ国町夷王山墳墓群から日本人の多数の墓とともにアイヌ民族の墓も検出され、両者が隣接して暮らしていたことがあったと理解された（上ノ国町教委2001）。

【19世紀後葉～20世紀】（第3図）1868年（明治元）から北海道への日本人の移民政策が始まった。北海道以外の46都府県から満遍なく移民があった（北海道1973）。その結果、北海道には日本人一般の物質文化の組合せが広まったが、アイヌ民族も2万人ほどおり、1980年代ごろまでは、日本人が大挙して移住してくる以前の民族特有の生活様式を保持する人々もそれなりにおり、それを支える物質文化の組合せもあった（H.Watanabe1973）。例えば、狩猟に仕掛け弓と矢毒を用いる、そしてクマ祭をおこなうなど、しだいに少なくなっていたにせよ、アイヌ民族独特の物質文化も存続していた。ただし、20世紀後半の物質文化の組合せは、移住者である日本人のものが非常に大きな比率となっていた。また、北海道の人々の使用言語はほぼ日本語となった。物質文化の組合せも、北海道全体として「日本文化」のものである。

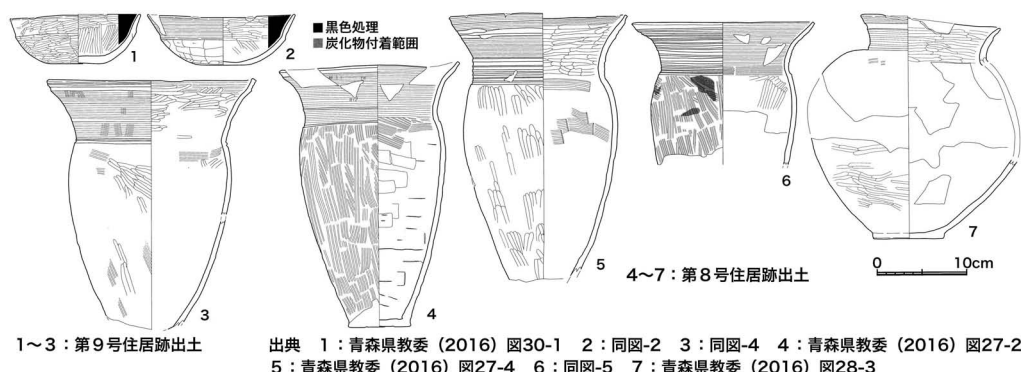
4. 考察

（1）津軽海峡の南北で言語共同体が違った時期

1）5世紀後半～6世紀

続縄文時代の後北C₂・D式土器使用期から現代までを対象とした場合、津軽海峡の南北で物質文化の組合せが異なるようになったのは、5世紀後半の北大1式期であった。それから6世紀の北大2式の時期まで、東北北部には遺跡がほとんどなかった。ただしこの時期、岩手県南部の奥州市中半入遺跡には土師器の時期の集落が出現している（岩手県文化振興事業団2002）。黒曜石製のラウンドスクレイパーも出土しており、古墳文化系の人々と続縄文文化系の人々が交流していることがわかる。したがって、東北北部に集落が見つからないとしても、北海道から南下する者、本州から北上する者が、東北北部を通過していたことは間違いない。

そしてその地を北から南へ歩き、そこから再び北海道を目指して歩く者たち、すなわち続縄文人たちこそが、東北北部の「～ナイ」という川を示すアイヌ語系地名を命名した者であり、そこを共に歩いた古墳文化系の者たちがその地名をその後も使い続けたからこそそれらが現在



第9図 金沢街道（1）遺跡出土土器

にまで残存した（松本2013）。これらの地名から、5世紀当時の北海道の続縄文人がアイヌ語系言語を話していたこと、すなわち、その語を話す言語共同体を形成していたことがわかる。

それに対し、中半入遺跡は古墳文化系統の人々の集落であった。そしてその遺跡の約2km南には日本列島最北の前方後円墳である角塚古墳が築かれていた。5世紀末葉～6世紀初頭ごろの築造と推定されており、中半入遺跡のような周辺の集落遺跡の造営と連動していることがわかる。さらに考えれば、東北北部東側の八戸市田向冷水遺跡からも同時期の古墳文化の人々の集落が見つかっており、それもこの時期の南の地域からの移住の跡と見ることができる。

中半入遺跡や角塚古墳で代表される東北北部よりも少し南の地域、そして田向冷水遺跡のように東北北部の一部に古墳文化の人々が来たときに、その地域の続縄文文化の人々の暮らしの姿がまったく見えなくなってしまう。同時代の北海道南部でも東北北部に近い渡島半島南部には北大2式土器を使う人々の痕跡はほとんど見つからないが、石狩低地帯には一定数の生活があった（第2図-2）。後北C₂・D式から北大1式土器使用期の東北北部から北海道南部には住居跡は見えないが墓が多数見つかる。古墳文化、すなわち農耕社会の人々との突然の接触によって、とくに5世紀中葉からは牧畜の影響も大きくなり、例えばそれらの人々しか持っていないような感染症の罹患者が出たりして、東北北部から渡島半島南部にかけての地域がそれを恐れ、徐々に石狩低地帯より北の地域で暮らすようになった。今のところ単なる空想だが、そんなふうに思えるのである。

2）7世紀（前葉～後葉）

東北北部に150年ほどの間、続縄文文化の人々が居住しない時期が続いた後、その誰も住んでいない地に古墳文化系の人々が移住してきた。牧場にするために、誰も使っていない広い土地を求めてのことであった（松本2011b）。それが可能だった東北北部は、その地域だけで十分な広さがあった。したがってさらに新天地を目指して北に行く必要を感じず、人々が馬とともに津軽海峡を越えることはなかった。その結果、7世紀前葉・中葉・後葉くらいまでは東北北部と北海道の文化の違いが大きくなったと読むことができる（第3図）。

ただし、7世紀の北海道南部でも東北北部の人々との交流はあった。5世紀前半までのように、同一の文化の人々同士の交流ではなかったために、両地域の物質文化の組合せが同じにな

ということとはなかった。だが、土師器の坏が出土した遺跡があった（第2図-3、第6図）。これらの坏の完成度の高さ、また下半部外面の器面調整がミガキであることから東北北部からの搬入品と考えられる。北海道の人々が「坏」というものを知り、多少でも使ったのは7世紀の北大3式期が最初であった。人々は東北北部の土師器の坏を知り、それが通常使い慣れている器と全く違う形態の丸底であり、ミガキ調整をおこなうものだとして認識した。ただし、北大3式期にはまだ坏はこの時期の北海道南部の生活様式を支える必需品とはなっていない。この時期の考古学的文化の物質文化の組合せのなかに入れられておらず、北海道で坏が製作されるようになるのは次の段階である。

東北北部の土師器の坏の調整がミガキであるのは続縄文土器製作技術の影響だという説があるが（八木2011）、そうではなく、まず東北北部で器面を磨く丸底の坏が出現したのである。土師器文化内での技術の影響があったのである。信州や会津といった東山道地域の6世紀の土師器坏はミガキ調整であること、信州は東山道地域であり、東北北部の末期古墳に類似する要素を持つ積石塚文化、雑穀農耕文化、馬飼文化である点から考えると、信州を代表とする東山道地域の馬飼文化域・ミガキ調整の土師器製作域から東北北部への移住者がいたと考えられる（松本2010）。

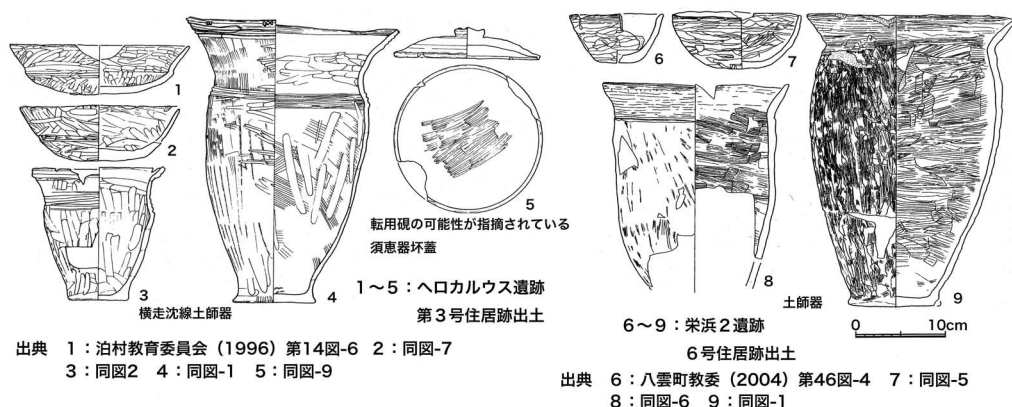
一方、東北北部はこの時期に完全に古墳文化の生活様式となっていた（第3図）。両地域の物質文化の組合せは大きく違っている。これは考古学的文化が異なるということであり、その変化の基礎にはそれぞれ言語共同体が違うがゆえに、婚姻関係、移住関係を含め、多様な交流がなかったことがあげられる。しかし、擦文土器の表面を木製ヘラでなでる調整や坏の持ち込みなどに見えるように、交流はあった。そしてそのことが次の時代の物質文化の変化として現れることになる。しかもこの7世紀の間の2～3世代ほどの時間を要した後の土器の変化が重要となる。

（2）津軽海峡の南北で相互の往来があった時期

1）3世紀後半～5世紀前半

後北C₂・D式土器から北大1式土器が使われているこの時期、津軽海峡を渡って相互の交流があった。七戸町森ヶ沢遺跡は、これら連続する2つの土器型式期間に渡って複数の墓地が営まれ続けた（阿部編2008）。遺跡周辺から住居跡は発見されていないが、墓が作られたということは死ぬ人、葬る人がいたのであり、複数の時期に渡る墓があることから見て、近くに集落があり、南北地域に続く道があったのであろう。

この時期のできごとで重要なのは、本州島の古墳文化地域は完全な農耕社会となっており、後北C₂・D式期の人々がその人々と交流をしていたことである。宮城県石巻市新金沼遺跡は古墳時代前期の集落であるが、ほぼ完形である後北C₂・D式土器が1点出土した（石巻市教委2003）。この他には続縄文文化の資料は出土していないが、両文化の人々がなんらかの交流をしていたことを物語る例である。ただしこの「交流」は、それほど頻繁なものではなく、また、互いの文化の変化を引き起こすような緊密な内容でもなかった。この時期までは2つの考古学的文化が併存していたのであり、異文化が併存していたのである。



第10図 北海道南部出土の横走沈線土師器と土師器 8世紀後半

さきにも述べたが、この時期、東北北部から東北中部域では古墳文化の人々との接触が多くなり、そのことがこの直後の時期に続縄文文化の人々が東北北部に居住しなくなることの重要な要因ではないかと推測できる。例えば農耕・牧畜民に特有の感染症があり、それに感染して亡くなる続縄文人が多かったために、秋田県能代市の寒川Ⅱ遺跡（秋田県教委1988）や青森県七戸町の森ヶ沢遺跡（阿部編2008）のような墓が数多く営まれたのではなかろうか。

2) 7世紀末葉～9世紀前半

北海道南部の北斗市矢不來3遺跡（上磯町教委1990）から7世紀末葉から8世紀前葉の、千歳市丸子山遺跡（千歳市教委1994）から7世紀末葉から8世紀前半の集落が見つかっている。カマド付竈穴住居とそこで使われる土師器の器種組成一式が出土した（第7図）。丸子山遺跡の土器は、口縁の下に横走沈線が数条巡りはするが、形態も器面の調整技法も土師器と言ってよいものである。また、器種組成から考えても、それは東北北部の土師器使用者たちのものである。幅広い観点から擦文土器について考察した横山英介はこれらを土師器と記している（横山1990）。

数は少ないが東北北部からも、その西側沿すなわち日本海側沿岸域からは口縁や頸部に沈線を巡らす土師器が出土することがある。青森県鯉ヶ沢町金沢街道（1）遺跡から横走沈線が巡る土師器長胴甕が出土している（第9図・青森県教委2016）。図示した8号・9号住居跡出土のものは8世紀前半の土器と報告されている（青森県教委2016；226頁）。北海道で頸部の横走沈線が多層となるのは8世紀後半である。沈線が施される土師器は東北北部では少数であり、そう頻繁なできごとではないかもしれないが、日本海側の沿岸域では8世紀前半から後半の時期に北海道南部と東北北部の西側とで相互に行き来があったのである。

北海道泊村ヘロカルウス遺跡E地点3号住居跡から、8世紀後半の土師器とともに転用硯の可能性が指摘されている須恵器坏蓋が出土している（第10図、泊村教委1996;27頁）。これが本当に転用硯であれば文字を書く人が滞在していたことになり、日本語話者がいたことの証となる可能性が高い。そこで、実物を実見しておらず、報告書の写真および実測図をもとにした不十分なものだが、考察しておく。8cm×8cmほどの範囲に同一方向に並行する擦痕が残る

(第10図-5)。須恵器は墨よりも硬く、墨を摺ってもこのような痕跡は残らず、須恵器の転用硯ならば、普通、磨かれた状態となる。したがって、転用硯とは言い切れない。

ただし7世紀末葉～8世紀の北海道南部からは横走沈線のない土師器が出土する集落もある(第2図-4)。これらの土師器の製作者のなかには東北北部からの移住者が含まれていた可能性が高い。北斗市矢不來3遺跡(第7図-7～11)や八雲町栄浜2遺跡(第10図-6～9)など渡島半島南部に複数認められる。横走沈線土師器の甕は頸部のナデが縦方向だが、土師器は、肩より上の部分は頸部ではなく口縁部と呼ぶべき形態で、そこの調整が横方向のナデである点も東・東北北部の土師器と共通である。そしてそれらが出土する遺跡の住居のカマドは北～北西向きである。東北北部の集落でも8世紀以前の住居のカマドは北・北東・北西方向を向き、9世紀以降になると北向きとは限らなくなる(松本2011a)。北海道南部の石狩低地帯の場合、7世紀末葉から8世紀前葉あたりの比較的古いものは北向きだがそれより新しくなると必ずしも北向きではない。沈線が施されない土師器が出土する集落は東北北部からの移住者が営んだ可能性が高い。荒ぶる神としてのカマド神を家の北奥に祀るという共通性を持っていた証だと考えておく(松本2011a)。

その後、北海道南部でも石狩低地帯では8世紀後半以降には土器に文様が施される比率がさらに高まり、9世紀前半には頸部以上に横走沈線が巡らされるようになり、9世紀後半には器面上半部に刻文が施され、北海道独自の土器である「刻文擦文土器」が成立した。7世紀末葉あたりにほぼ土師器と言ってよい土器が作られはじめたが、それから4～5世代が過ぎたころには、土師器は無文というイメージから、土器には文様があるというイメージへと変貌する様子が見られる。移住者の数が少なく、また移住が継続せず、文化が在地のものに吸収されたのである。

(3) 1868年以降の人口増加と言語の置換

明治期に入ると、日本国政府の政策で北海道には大量の移民が入り、1870年(明治3)に7万弱だった人口が1920年(大正9)までの50年ほどの間に235万人を越すほどになった(北海道2017)。移民は日本語を話す人々であった。この間、1899年(明治32)に北海道旧土人保護法が制定され、アイヌ民族に日本の初等教育を普及するように仕向けたのだが、翌年1900年(明治33)には、「旧土人児童教育規定」を定め、国語の授業では日本語による日常生活を達成させることに重点を置き、就学当初に日本語を修得させアイヌ語の排除を目指した(小川正人1997)。そのような状況のなか1915年(大正6)には、浦河支庁管内(日高地方)に232/5349人、胆振支庁管内に93/3498人、旭川市内に3人、網走支庁管内に3人の者を除けば、日本語を理解しない者は北海道内にはほぼいなくなったと述べられている(北海道庁1926)。1868年の入植開始以来50年ほどが経過する間、すなわち2世代ほどの間に北海道で暮らす人々の言葉はアイヌ語から日本語に置換されていたのである。

近代の北海道で起こったアイヌ語から日本語への置換については日常の生活の結果だけではなく、強制的な教育が及ぼした影響も大きいのだが、ハワイ、ブラジルなどへの近代の移民についての調査にもとづけば、強制されなかった場合でも、一般に移住前の母語から移住先の言葉

に3～4世代で置き換えられてしまう（小野2001）。年代幅にするとほぼ100年である。ただし、このハワイやブラジルの例は、移民の人口が移住先の在来民の人口よりかなり小さな場合であることに注意が必要である。近代の北海道での例のように、移住者のほうが在来民よりも人口規模が大きな場合、逆のことが起こっていたのである。

また、言語学者村崎恭子によって1962年8月現在、北海道の地域に千島アイヌ語を話す人がすでに一人も存在しないという報告がなされている（村崎1963）。これは北海道在中の人だけを対象とした調査の結果だとう制約はあるが、非常に限られた人数しか存在していなかった千島アイヌ語を母語としていた人々がどのようにして日本語を母語とするに至ったかを、わずかではあるが明確にできる事例である。内容を簡単に記す。

当時、家系から考えて千島アイヌ語を話せる可能性があると考えた方々は7名だけであった。千島アイヌ直系だとされる方2名（69歳、年齢不明）、和人と“混血”の方が4名（48歳、44歳、40歳、年齢不明）和人だがアイヌに育てられた方が1名（71歳）であった。

69歳のアイヌ直系の女性は、調査に入った部外者の村崎に、自分がアイヌ語を知っていることを絶対に知らせまいとして面会を拒み続けたのだが、アイヌであることで受けた迫害がそうさせたかと村崎は考察している。アイヌ語を話すことは自らがアイヌ民族であると示すことになると強く理解されていたことを示す例である。

なお、1962年当時40代だった方々はことごとく日本語しかわからなくなっていたという。48歳で1914年あたりの生まれであり、北海道への大規模な移住が開始された1868年を基点に考えると、それから46年後の生まれなので、3代目ぐらいだと推定できる。

ほかに村崎の報告には物質文化と言語との関係を考えるうえで重要な部分がある。伝聞の形ではあるが、調査対象とされた方々の生活に触れたところが少々ある。調査できなかった方がもう1人いたのだが、別の2名のインフォーマントからその人はアイヌ語を知らぬ聞かされた。その人の家は早くから和風にしていて千島アイヌの風俗習慣を持っていないというものであった。本来の母語を話さなくなることはその集団の文化も手放すことであると同じ集団に属していた人々からも思われていたのである。ある言語共同体に属するという意識を持つうえで重要なのは、共通の言葉、風俗慣習、それに関連した物質文化を持つことなのである。

（4）津軽海峡の南北地域での農耕の開始とヒトの移住

1）東北北部での農耕・牧畜の開始と展開

砂沢式期と田舎館式期に水稻耕作がおこなわれた。ただし、石包丁・太型蛤刃磨製石斧・方刃磨製石斧といった弥生文化地域の石器組成がすべて揃っていたわけではない。土器も同時期の北海道で作られていた続縄文土器に類似するものであった。一般には水稻耕作がおこなわれていたことで、弥生時代前期から中期に相当する砂沢式期から田舎館式期ではあるが弥生文化の文化要素一式が揃っていたわけではなく、文化的には水稻耕作を取り入れた続縄文文化と言うべきである。そして弥生時代後期に併行する時期の土器が使われるころになると、物質文化の種類が急減し、農耕を示す要素は消滅した。この時期までに東北北部に農耕が定着することはなかった。

当該地域に農耕・牧畜を基本とした社会が突然出現したのは7世紀であった。完成したそれらの技術を持つ集落が最初から造営されていた。物質文化の組合せもすべてが古墳文化系統のものであり、移住者による集落と考えるのが妥当である（松本2006）。馬飼の技術は簡単に学べるものではなく、馬を飼う目的がなければその難しい技術を学ぶこともない（松本2011b：62-63頁）。また、カマド、土師器長胴甕、甑、坏、高坏、須恵器甕こうした物質文化のセットがあり、農耕・牧畜の「農事暦」を基本とする儀礼・祭をおこなっていたと考えることができる。そして集落の急増が人口の増加を示し、このことも、東北北部に出現した集落が移住者のものであることをよく物語る点である。

2) 北海道南部での農耕・牧畜の開始と展開

石狩低地帯では8世紀以降にアワ、キビ、オオムギなどが栽培されるようになった（山田2000）。擦文期にはヒエがみつかる遺跡は少ないが、アイヌ期になるとアワに並んでヒエが一般的になった（山田2008）。北海道南部でも一度、穀物などの栽培が始まると継続しておこなわれた。なお、8世紀にアワなどの栽培が始まった背景には東北北部あたりの農耕社会からの人々の移住があった可能性が高い。7世紀末葉から8世紀の集落には、カマド付堅穴住居、土師器（長胴甕、甑、坏、高坏）など、当時の東北北部の農耕社会が持つ物質文化の組合せの一部を持っているのである。しかしながら、移住者の数がそれほど多くなかったのと、移住が継続しなかったので9世紀前半には在地の文化に吸収されていった（第3図）。

擦文時代以降の畑遺構が検出された例はしだいに増えつつある。横山英介によると北海道南部に18箇所、北部に1箇所、東部に1箇所ある（横山2009）。ただその畑の耕作者が誰であるかに関しては、多くは日本人であったと考えられているが、千歳市、伊達市にアイヌ民族の畑だと認められる例が1遺跡ずつある（横山前掲）。文献によれば、近世にアイヌ民族が農耕をおこなっていたとする記録は比較的多く、北海道南部に関しても、渡島半島日本海側の瀬棚、寿都などでアイヌ民族がアワを栽培していたという1715年の記録がある（山本1996）。今後もアイヌ民族の耕作による畑遺構の発見は増えるであろう。

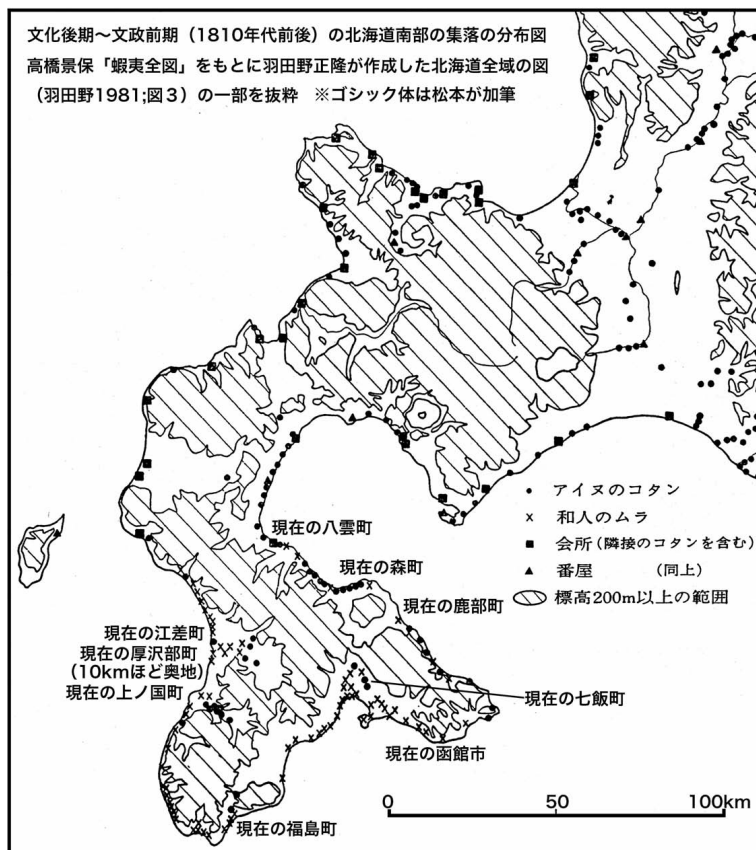
ただし、近世～近代初頭のアイヌ民族の生活様式を考えるならばそれらの穀物が主食とされることはなく、アイヌ社会が人口増加を基本とした農耕社会となることはなかった。そして「クマ祭文化複合体」として認識できるのがアイヌ文化・社会であった。穀物の栽培が開始されても、採集と狩猟を基本とした生活様式のなかにそれを加えた状態だったと読み取ることができる。

また、12世紀後半以降に東北北部西側の日本人たちが渡島半島南端に居住しはじめたが、すぐに居住域をさらに北の地域に拡大することはなく、日本人関連の遺跡が増え始めるのは14世紀になってからであった（第8図）。17世紀初頭には渡島半島南西端に松前藩が成立したが、19世紀後葉までその居住域、生活域を渡島半島より北の内陸地域まで広げることはなかった。松前藩の領域が幕府の直轄領となっていた文化6年（1809）に整理された史料『村鑑』（松前周辺地の家数、人数、稼業、産物などが記されている）によると、馬を放し飼いしている関係で、あまり広い面積の畑を作っている地域はかぎられていたという。ただし、知内村（現在の知内町）では5～6反、あるいは1町歩も耕している者もあり、ダイズ、アワ、ヒエ、ソバ、

ダイコン、タバコなどを作っていた。松前市中でも台地のうえの地域にはかなりまとまった耕地があり、全部で40町歩ほどだったという（松前町史編纂室1988）。

松前町の北隣りの上ノ国町における勝山館跡や夷王山墳墓群の発掘調査によると、15世紀から16世紀にはアイヌ民族と日本人とが隣接して暮らしていた（上ノ国町教委2000・2001）。19世紀前葉ころにも現在の上ノ国町域、厚沢部町域、函館市域などの日本人の集落に隣接してアイヌ民族のコタンがあった（第11図、羽田野1981）。その様子から見ると、日本人たちの生活が周辺のアイヌ民族を農耕社会に変えることはなかったのである。

北海道南部では、8世紀以降、雑穀栽培をおこなってはいたが、それを主食とするような生活様式となることはなく、採集狩猟を基本としてそのサイクルのなかに組合せたものであった。北海道南部には、14～19世紀に農耕・牧畜社会の民が暮らすようになっていたが、アイヌ民族に生業活動で大きな影響を与えることはなく、言語置換も起こらなかった。農耕・牧畜民の生活様式が北海道全域を覆い、アイヌ語から日本語への言語置換があったのは19世紀後葉から20世紀前葉に日本国の移民政策によって、大量の移住者が日本語とともに入植したときであった。



第11図 北海道南部のコタンと日本人の集落の分布

(5) 物質文化の組合せと製品の完成度

本節(3)で千島アイヌ語の消滅の報告を示したように、もとの母語を使わなくなるとき、言葉ばかりではなく、自分が属していた文化要素一式も使わなくなっていた。物質文化の組合せ＝考古学的文化から言葉の変化を読み取れることがわかるのである。言葉を話す側に立って考えると、自ら意識して言葉を変える場合もあり、そんなときは意識して文化要素一式も変えているのであろう。このように、どの言葉を話すかというのは、自分がどの集団に属しているかを表明することになる。そして、先住民である採集狩猟民が住んでいる領域に、多数の農耕民が2世代ほどに渡って移住し続けた場合、そこは農耕地域となり言葉も移住者のものへと置換が起こり、その領域の物質文化の組合せは移住者が持ち込んだものになるのであった。

その逆で、異言語の人々と接触した後の4代目5代目のように、生まれたときすでもとの母語を話す人々が周囲にいない、例えば現代の北海道のアイヌ民族にも見られることであるが、場合によっては、後に祖先の文化に興味を持ち、言葉や大切な儀式を復活させようと努力する人や、それに関わる物質文化の一部を所持しよう、それを作ろうとする人もいる(西浦1997)。

また、移住者の数がそれほど多くなかった場合、中世から近世にかけてのアイヌ民族がそうであったように、先住者は、雑穀栽培もおこなうが完全な農耕民とはならず、人々の持つ物質文化の組合せに農耕民由来のものも加えるが、採集狩猟民のものも残す場合がある。これは縄文時代晩期終末の大洞A式期から砂沢式期にかけての変化に似ている。砂沢式期にも水稻耕作をおこない、物質文化の一部に弥生文化の要素も見えたが、文化要素の大部分は前時代のものを継続していた(弘前市教委1991)。

そしてこの場合、先史時代のヒトの移住を知るのに使えるのは考古学資料であり、物質文化の組合せを見ることになる。ただしこの場合に見るべきなのは「組合せ」であり、個々の資料の細かい差異、別の言葉で言えば「製品の完成度の高低」ではない。

例えば、古墳文化と一口に言っても、土師器の形態や器面の調整技法などは地域ごとに特色がある。7世紀の東北中部の太平洋側から関東地方の土師器坏の下部外面はケズリ調整だが、信州や会津ではミガキ調整が施される(松本2010)。古墳時代の長胴甕の形態には地域ごとに様々な特徴がある。しかしカマドで使われる土師器の器種組成は古墳文化で共通である。このように考古学的文化で共通なのは、個々の器種の細かな形態や調整技法ではなく「物質文化の組合せ」である。

そして、移住者の集団を構成している人々のなかに、土器などの製作に慣れた者が必ずいるとは限らない。近代の北海道、ブラジル、ハワイなどへの移民もそうだが、未開拓の地域を目指すような移住の場合には、若い人々が主体となるのが普通であり、様々な技術の専門家で構成されるわけでもない。東北北部の7世紀の集落から出土する土師器のなかには技術が未熟なものもあろう。北海道南部の7世紀末葉から8世紀の土師器に完成度が低いものがある場合も、同様な理由が考えられる。北斗市矢不来3遺跡(第7図)や八雲町栄浜2遺跡出土(第10図)の土師器はやや稚拙だが横走沈線が巡らない。自身の頭のなか出身地の土師器のイメージを持つ、東北北部からの移住者によって製作されたものだと考える。

5. 結論：考古学から見たヒトの移住と言語置換

(1) ヒトの移住を示す考古学的事例

本稿では津軽海峡の南北の地域の3世紀後半から21世紀までの物質文化の変化を見て、その背後にある人間活動を読み取ろうとしてきた。その結果、東北北部はその東部では7世紀に、西部では8～9世紀に、北海道は7世紀末葉～19世紀末葉に採集狩猟民の社会から農耕民の社会に変わったことがわかった。それらの地域が農耕社会になるにはヒトの移住が必要だった。先住民である採集狩猟民が自主的に自らの文化を変容させたのではなく、異文化の民である農耕社会の担い手たちが集団で、しかも継続した移住活動の結果、それまで農耕が定着したことがなかった地域が広く農耕化したのであった。

東北北部に農耕社会を担う人々の移住がはっきりと見えたのは、第1波が5世紀後葉～6世紀初頭、第2波が7世紀～8世紀、第3波が9世紀～11世紀であった。これは以前に「移住の3つの波」と表現したできごとであった（松本2006）。そして北海道南部へのそうした動きは、第1波が7世紀末葉～8世紀、第2波が14～15世紀、第3波が19世紀後葉～20世紀前葉に見られた。

ヒトの特徴は社会を構築することであり、移住を示す考古学事例で基本となるのは、生活様式を示す文化要素を含む集落遺跡であり、社会を支える思想・宇宙観を示す儀礼などにかかわる遺構・遺物ということになる。

(2) 言語置換：東北北部と北海道

1) 東北北部での言語置換：7世紀

津軽海峡を境としてその南北の地域は、5世紀前半まで同じ考古学的文化を持つ人々が暮らしていた。両地域の考古学的文化が違うものになったのは7世紀だった。そして、それより前の6世紀の東北北部にはほぼ誰も住んでいなかった。誰も住んでおらず、北海道から東北中部以南に向かう人々、逆に南の地域から北海道に向かう人々が通過する地域となっていた東北北部に人々が集落を営み暮らすようになったのが7世紀であった。そこに古墳文化の系統の人々の集団が移住してきたのであり、東北北部は日本語古語が話される地域となったのである。『日本書紀』斉明天皇紀5年の条に書かれたような古代の蝦夷は、7世紀以降の東北北部には存在していなかったのである。

2) 北海道南部でのアイヌ語と日本語の併存

7世紀末葉から8世紀前葉には北海道南部にも日本語話者の移住があった。しかし移住者は少なく、9世紀後半までには先住の文化に同化していた。14世紀から15世紀には渡島半島南端に日本語話者たちの移住があった。17世紀にはその地域が日本領の松前藩となりさらに日本語話者が増えた。だが、日本人たちは意欲的に耕地を広げようとはせず、アイヌ社会を農耕社会に変化させることもなかった。渡島半島南部では日本人集落とアイヌ民族のコタンが隣接し、アイヌ語と日本語とが併存していた。それは1868年ごろまで続いた（第11図）。

3) 北海道での言語置換：20世紀

1868年以降、近代日本国政府の政策で日本語話者が北海道に大量に移住した。大規模な移民は1920年ごろまで続き、移住開始期に7万ほどだった北海道民の人口は約50年で235万ほどになっていた。そして移住開始から約100年後の1960年代にはアイヌ語を生活に使う者はほとんどいなくなっていた。千島アイヌ語は1962年には消滅したと報告された（村崎1963）。北海道への農耕民の大規模な移住の結果、ほぼ100年で言語は置換えられたのである。

(3) ヒトの移住と言語置換

ホモ・サピエンスの誕生以来ヒトは移住を繰り返してきたが、ヒト集団の移住には共通項があった。農耕社会・牧畜社会になってからは土地を求めての場合が大きかった。また、農耕も牧畜も技術であると同時に生活環境への働きかけであり、環境を変化させることでもあるので、誰もがどの社会でも必ずそれを始めるということではなかった。採集狩猟民の社会では、それまでの生活様式のなかに穀物の栽培などをうまく組み込める場合には取り込むことがあったが、あくまでも生活様式の一部とするのであり、すぐに農耕主体の生活様式に変えてしまうことはなかった。したがって農耕が拡散される実態がある場合、それをおこなう集団の移住があったことになるのである。

採集狩猟→農耕・牧畜＝人口増加社会といった単系の変化を考えるのではなく、それに並列して、採集狩猟→採集狩猟＋栽培＝非人口増加社会、といった多系の変化があった。前者は農耕民である移住者が多数であった場合、後者は移住者が少なかった場合に起こり得た。前者は東北部で7世紀から9世紀、北海道で19世紀後葉から20世紀におこったことであり、後者は8世紀から19世紀の北海道で見られたことである。

そしてその多系の変化があったことは、言語の残存状況、あるいは物質文化の組合せ＝考古学的文化の残存状況によって読み取ることができるのである。

6. おわりに

19世紀後葉から20世紀前葉の北海道で言葉の置換が進み、その開始から約100年が経過した20世紀後葉、ほぼ3～4代の間にアイヌ語話者が日本語話者となっていた。ただし、大量に流入した移住者の文化はすぐに定着していた。先住民の言語が置き換わるのに、長く見て100年ほどかかったということである。北海道南部でも農耕民との接触は7世紀以降に起こっていたのだが、当地の人々は雑穀の栽培をおこないながらも採集狩猟を基本とした生活を維持続けた、非人口増加社会であった。そしてその接触から1000年以上の後、農耕民の大量の移住があってはじめて北海道は農耕社会、人口増加社会へと変貌したのであった。14世紀後半以降の北海道南部南端には農耕や牧畜の技術を持つ日本語話者たちの集落がしっかりと根付いていたにも関わらず、採集狩猟民は新たな文化を学び農耕民となろうとはしなかったのである。

北海道での採集狩猟民と農耕民とのこのような関係を見るならば、農耕民が隣にいたからといってすぐにその文化を取り入れるわけではないことがよくわかる。縄文時代における、ヒョ

ウタン、オオムギ、コメといった外来種である栽培植物の度々の出現や、新石器時代の中国大陸に見られるものと同様の、平面形が方形である住居の繰り返されるその出現と衰退を見るならば、西側の大陸方面から農耕文化の波が繰り返しやってきては在地文化に吸収される姿が見て取れる。弥生時代におこった農耕化についても、単純ではなく時間がかかったとされている(藤尾2003、宮本2017)。農耕民の日本列島への移住はおそらく縄文時代から度々あったことである。今後も日本列島上へのヒトの移住とその展開といった観点からさらに研究を続けたい。

謝辞

2020年度10月から半年間、本学の長期研究期間制度を使い、北海道伊達市噴火湾文化研究所に研究室をお借りして北海道への人々の移住に関する研究をおこなった。本稿は北海道南部に関する研究の一部である。コロナ禍にもかかわらず多くの方々のご協力くださった。伊達市教育委員会・長谷幸人氏、新ひだか町博物館・斉藤大朋氏、八雲町教育委員会・柴田信一氏、厚沢部町保健福祉課・石井淳平氏、七飯町教育委員会・山田央氏、北斗市教育委員会・時田太一郎氏、上ノ国町教育委員会・塚田直哉氏、松前町教育委員会・佐藤雄生氏には、遺跡・資料の実見・報告書利用の際に、それぞれにたいへん親切なご対応をいただいた。函館工業高等専門学校・中村和之氏、札幌大学・瀬川拓郎氏、函館市・横山英介氏、松前町・久保泰氏には研究上のアドバイスをいただいた。記して感謝申し上げる。

註

- 註1：弥生時代に農耕社会がどのように定着したのかについては藤尾(2003)、宮本(2017)といった研究がある。前者は言葉については言及されていないが、在来の縄文人が弥生文化の担い手となったと考えている。後者は農耕社会の担い手が古日本語を持ち込んだとする M. ハドソン説を肯定している。
- 註2：100km という数字に一般化できるほどの根拠はない。ただし、採集狩猟による生活を送った最後の世代の古老たちから聞き取った情報をもとに復原された、1880年代のアイヌ民族の十勝川流域における川筋集団の活動範囲(H.Watanabe1973; 巻末 Map.2.)を参考にしてその領域を示したのが第1図-2であるが、100km 四方の範囲に二つの集団のテリトリーが含まれていた。採集狩猟民であるアイヌは一つの集団の活動範囲が非常に広い。100km 四方を東北部から北海道南部に当てはめてみると第1図-2のようになる。面積から考えると、東北部・北海道南部とも3×100km 四方ずつほどとなる。
- 註3：5世紀後葉～6世紀前葉ごろ、北海道と東北南部の居住者間で交易がおこなわれている場合、その間に挟まれる東北部のような地理的条件となる地域は、土器片が出土する遺跡すら見つかっていないとしても、その南北にある地域の人々にとって、通路、資源探索地など、様々な活動の場だった可能性はある。

引用・参考文献

- 青森市 2012『青森市史』
- 青森県史編さん古代部会 2005『青森県史資料編古代3 弥生～古代』
- 青森県史編さん通史部会 2018『青森県史 通史編1 原始 古代 中世』
- 青森県教育委員会 2016『金沢街道沢(1)遺跡 新沢(1)遺跡 新沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第563集
- 秋田県教育委員会 1988『一般国道7号線八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書1』秋田県文化財調査報告書 第167集
- 厚沢部町 1981『桜島 第2巻』
- 阿部義平編 2008『寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告』国立歴史民俗博物館研究報告144集
- 石巻市教育委員会 2003『新金沼遺跡』石巻市文化財調査報告書11
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集
- 煎本 孝 1987「沙流川流域アイヌに関する歴史的資料の文化人類学的分析：C.1300—1867年」『北方文化研究』18号 1-218頁
- 宇田川 洋 2001『アイヌ考古学研究・序説』北海道出版企画センター
- V.G. チャイルド 1956 [近藤義郎・木村祀子訳1969]『考古学とは何か』岩波新書
- 恵庭市教育委員会 『中島松7遺跡』
- 江別市教育委員会 1982『萩ヶ岡遺跡』江別市文化財調査報告書15
- 遠藤匡俊 1997『アイヌと狩猟採集社会—集団の流動性に関する地理学的研究—』大明堂
- 遠藤匡俊 2017「縄文時代中期末葉の本州北部の田中遺跡と大平遺跡における集団の空間的流動性の可能性—1856～1869年のアイヌ集落との比較」『日本考古学』44号
- E.B.Tylor 1871 *Primitive Culture* Brentano's Publishers New York
- 小川正人 1997『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学図書刊行会
- 小樽市教育委員会 1989『蘭島遺跡』
- 小野米一 2001『移住と言語変容—北海道方言の形成と変容』溪水社
- 上磯町教育委員会 1990『矢不來3遺跡』
- 上ノ国町教育委員会 2000『史跡上之国勝山館跡XXI』
- 上ノ国町教育委員会 2001『史跡上之国勝山館跡XXII』
- 上ノ国町教育委員会 2018『かみのくに文化財ガイドブック』
- 北東北古代集落遺跡研究会 2014『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』
- 木下太志 2003「第1章 狩猟採集社会の人口」『人類史のなかの人口と家族』晃洋書房 1-22頁
- 木下太志 2014「人類史からみた環境と人口と家族」『比較家族史研究』28号 47-65頁
- 金田一京助 1951「えみし(蝦夷)の国」『国学院雑誌』52巻1号 [『金田一京助全集6 アイヌ』第112輯 (2021)]

- 語Ⅱ』所収 300-314頁〕三省堂
- 工藤雅樹 2000『古代蝦夷』吉川弘文館
- 熊谷公男 2013『古代蝦夷論の再構築に向けて』『歴史と文化』50号 1-20頁 東北学院大学
- C.レンフルー 1987『ことばの考古学』青土社
- C.Renfrew 2001 “The Anatolian Origins of Proto-Indo-European and the Autochthony of the Hittites” *Journal of Indo-European Studies Monograph* No.38, PP.36-63 The Institute for the Study of Man
- 斉藤 淳 2016「土器からみた地域間交流—秋田・津軽・北海道—」『北方世界と秋田城』155-190頁 六一書房
- 榊田朋広 2016『擦文土器の研究』北海道出版企画センター
- 下田町教育委員会 1991『中野平遺跡』
- 瀬川拓郎 2005『アイヌ・エコシステムの考古学』北海道出版企画センター
- 瀬川拓郎 2015『アイヌ学入門』講談社現代新書
- 関根達人 2014『中近世の蝦夷地と北方交易』吉川弘文館
- 関山直太郎 1969『近世日本の人口構造』吉川弘文館
- 総務省統計局 2021『第70回日本統計年鑑令和3年』www.stat.go.jp/data/index.html
- 高橋 崇 1986『蝦夷（えみし）』中公新書
- 高橋富雄 1991『古代蝦夷を考える』吉川弘文館
- 千歳市教育委員会 1994『丸子山遺跡』千歳市文化財調査報告書 XIX
- 泊村教育委員会 1996『ヘロカルウス遺跡 E～G 地点』
- 中村和之 2021a「『諏訪大明神画詞』の「唐子」をめぐる試論」『国際日本学』18号 186（1）-168（19）頁 法政大学国際日本研究所
- 中村和之 2021b「モンゴル帝国と北の海の世界」『元朝の歴史—モンゴル帝国期の東ユーラシア』239-250頁 勉誠出版
- 中山誠二 2010『植物考古学と日本の農耕の起源』同成社
- 七飯町教育委員会 2000『上藤城3遺跡発掘調査報告書』
- 西浦宏己 1997『アイヌ、いまに生きる』新泉社
- 羽田野正隆 1981「十勝平野におけるアイヌ集落の立地と人口の変遷—江戸時代後期を中心に—」『北方文化研究』14号 173-198頁 北海道大学文学部附属北方文化研究施設
- 八戸市遺跡調査会 2001『田向冷水遺跡Ⅰ』
- 八戸市教育委員会 2005『田向冷水遺跡Ⅱ』
- 弘前市教育委員会 1991『砂沢遺跡発掘調査報告書 本文編』
- 藤尾慎一郎 2003『弥生変革期の考古学』同成社
- F. ソシュール 1916 [町田 健訳2016]『一般言語学講義』研究社
- 北海道 2017「3. 人口」『第124回（平成29年）北海道統計書』www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/4/7/7/3/4/8/_/920hsy17_03.pdf
- 北海道 1973『新北海道史』第4巻通説3

- 北海道庁 1926『北海道旧土人概況』[河野本道選1980『アイヌ資料集第1巻』所収]
- 北海道埋蔵文化財センター 2002『中島松5遺跡』北海道埋蔵文化財調査報告書第178集
- H.Watanabe 1973 *Ainu Ecosystem* University of Washington Press
- P. ベルウッド 2005 [長田俊樹・佐藤洋一郎監訳2008]『農耕起源の人類学』京都大学学術出版会
- M.Hudson 1994 “The linguistic prehistory of Japan : some archaeological speculations”
Anthropological Science, 102 : pp.231-255 Anthropological Society of Nippon
- M. ハドソン 1999「言語学からみた日本列島の先史時代」『はじめて出会う日本考古学』191-211頁 有斐閣アルマ
- 松前町史編集室 1984『松前町史通説編第一巻上』
- 松前町史編集室 1988『松前町史通説編第一巻下』
- 松前町教育委員会 1985『札前』
- 松本建速 2006『蝦夷の考古学』同成社
- 松本建速 2010「蝦夷は古代日本国領域からの移住者か」『季刊東北学』22号 93-114頁 東北文化研究センター
- 松本建速 2011a「東北北部における古代集落とその居住者」『東国の地域考古学』325-358頁 六一書房
- 松本建速 2011b『蝦夷とは誰か』同成社
- 松本建速 2013「東北北部にアイヌ語系地名を残したのは誰か」『考古学研究』60巻1号 55-75頁 考古学研究会
- 松本建速 2014「移住と社会変動の関係」『考古学研究会60周年記念誌 考古学研究60の論点』121-122頁 考古学研究会
- 松本建速 2018『つくられたエミシ』同成社
- 松本建速 2020「エミシの言葉と考古学 人口非増加社会から人口増加社会への変化」『世界と日本の考古学 オリーブの林と赤い大地』457-477頁 六一書房
- 松本建速 2021「考古学資料から言語共同体を読む—古代東北北部の人々はアイヌ語を話したか—」『紀要』111輯 25-42頁 東海大学文学部
- 松本建速・伊藤順一 2009「EDX-XRFによる長野県神坂峠遺跡・青森県中野平遺跡出土石製模造品の石材の産地推定」『日本文化財科学会第26回大会予稿集』350-351頁 日本文化財科学会
- 宮本一夫 2009『農耕の起源を探る』歴史文化ライブラリー276 吉川弘文館
- 宮本一夫 2017『東アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社
- 村崎恭子 1963「千島アイヌ語絶滅の報告」『民族学研究』27巻4号 657-661頁
- 八雲町教育委員会 2004『オクツナイ2遺跡』
- 八木光則 2011「古代北日本における移住・移民」『海峡と古代蝦夷』215-235頁 高志書院
- 八木光則 2018「アイヌ語系地名と蝦夷」『古代国家と北方世界』243-262頁 高志書院
- 山田悟郎 2000「擦文文化の雑穀農耕」『北海道考古学』36輯 15-28頁 北海道考古学会

松本建速

- 山田悟郎 2008「中・近世アイヌ民族の農耕活動の実態について―発掘された畠跡と種子をもとにして―」『北海道開拓記念館研究紀要』36号 37-56頁 北海道開拓記念館
- 山本 正 1996『近世蝦夷地農作物年表』北海道大学図書刊行会
- 余市町教育委員会 1989『沢町遺跡』
- 横山英介 1990『擦文文化』ニュー・サイエンス社
- 横山英介 2009『考古学からみた北海道の焼畑―果たしてアイヌは焼畑を営んでいたか―』北海道新聞社出版局
- R. キング編 2007〔蔵持不三也監訳2008〕『図説人類の起源と移住の歴史 旧石器時代から現代まで』柊風舎
- R. ヒッチコック 1892〔北構保男訳1985〕『アイヌ人とその文化』六興出版
- 渡辺 仁 1972「アイヌ文化の成立」『考古学雑誌』58巻3号 47-64頁